

盛岡市立安倍館保育園長

盛岡市立桜ヶ丘保育園長（新設）

軍歴

昭和十四年五月一日 現役兵として、弘前歩兵三十一

連隊留守隊に入隊

昭和十四年八月一日 千葉陸軍歩兵学校教導連隊に派

遣

昭和十六年八月 関特演のため原隊復帰（北部十六部

隊）改編

昭和十六年十一月三十日 満期除隊陸軍兵長（下士官

適任証受ける）

昭和十八年十月十八日 応召

弘前北部十六部隊に入隊渡満チチハルにて独立守備隊

昭和十九年七月一日 特別補充下士官用員として旅順

四一五部隊（下士官教育隊）に派遣され八月三十一日

教育終了原隊復帰

昭和十九年九月一日 任陸軍伍長

部隊改編満州第七師団歩兵一七七連隊第一大隊本部

付きとなる。

昭和二十年八月九日 日ソ開戦となる

昭和二十年九月一日 終戦後五福瑯において、猪俣大

隊長より陸軍軍曹の任命の令伝達され軍曹となる。

抑留

昭和二十年十月 シルロア

昭和二十三年五月 チタ

昭和二十三年十一月二十日 栄豊丸 復員

（岩手県 田辺 壮久）

シベリア抑留

岩手県 本宮 龍平

ラーゲル時代

タシケントのカマボコ兵舎

私が牡丹江ポダシコウに近い掖河エキガの野戦病院を退院したばかり

なので、中央アジアの暖かい地方に送られた。戦地で

別れた友達達は皆シベリアを経験している。

国境の町、綏芬河スイフンガを出てから二十四日目、シベリア

を通つてウズベック共和国のタシケントに着いた。中央アジアのソ連西南部タシケントは、ウズベック共和国の首都である。住民はトルコ系、温暖な気候で穀倉地帯、革命以前は豊かな国であったが、今は中央政府に搾取されていると言っていた。収容所に入る前に衣類を消毒してからという事で、その夜は野宿することになった。ここは暖かい夜であった。

カマボコを並べたような宿舎で、三段式の鉄の揚げ床式寝台で、五百人単位の収容所である。まず身体検査のために裸にされて体毛を全部剃られ、頭はDDTをかけられ、衣類の検査と消毒。二十日くらいは仕事はなく、身のまわりと収容所内外の清掃をした。

スターリン給養

食事は当初は割合によかったように思う。ほとんどが関東軍糧秣倉庫より満州で押収したものであった。最初は国際法に基づいて給養は、穀類三百グラム、黒パン三百グラム、野菜八百グラム、肉魚百六十グラム、塩二十グラム、砂糖十八グラムが決まっていたようである。ごく少ない物であるが、これを忠実に守つ

てくれたら、食料にまつわる悲劇はなかったと思う。

ロシア人が炊事場をのぞいて、自国民より良い物を食わしていると言つて憤慨していた。まずくても腹いっぱい食べたいのであるが、チャサポイ（監視兵）の横流し等あつて、給養の三〇〜五〇%しかなかった。

ソ連の監視兵

初めの作業は、国营農場の作業、タシケント市街地では軍関係の建設作業、レンガ工場での作業などであつた。

引率するソ連兵による人数を数える点呼が変わつていた。算数は小学校三年生それ以下、溝を跨がせて一人一人数える事しかできない。トラックがクラクシオンを鳴らして通過すると、監視兵はその音で数えた人数を忘れてしまう。また最初からやり直し。全く程度が悪い。

ソ連兵は、作業現場でも、至る所で若い女をつかまえて真昼の情事に及ぶ。腹をすかせている私たちは、なんの感情も起こらない。妊娠が認められると、保護

され妊婦は軽作業になる。出産後は私生児は、国家が施設で育ててくれる国策である。

恵まれない老人

日露戦争の捕虜で、日本の大阪にいたことのある老人が、一銭で饅頭が買えたと言っている。日本のミカド（天皇）ハラシヨーと言っていた。

ロシアも帝政ロシア時代はよかったと言って、辺りを見回した。共産党を気づかっている。

老人は四十年前のことを思い出している。自由もなく働いただけと不満を漏らしていた。彼らは共産党の事は一切口を閉ざして、その事に触れない。辺りを見回すのである。妻が夫を、息子が親を密告する、なんと悲惨な社会のような気がした。

トルクメン共和国

何か月かして、作業隊は移動することになった、その度に「東京ダモイ（日本に帰る）」と言って口車に乗せられる。ここはトルクメン共和国、カスピ海東部、大部分は砂漠地帯、カラコルム砂漠のカラコルム山脈につながりイラン国境と接する。

作業は砂漠の中にある灌木でサキサオールという、油気の多い木で軍用の薪にするそう、タポール（まさかり）だけを持って砂漠の中の灌木の場所に入る。

作業のノルマ（作業の数量）は、薪の長さ一メートル、高さ一メートル、幅三メートル、日本ではちょうど一柵と言っている。ナチャニック（現場監督）の都合でだんだん増やされるので、ノルマの達成は容易でなかった。

食事の悲劇は最後まで

朝食は黒パン少々と粗末なスープ。暗いうちに食べ、作業中の昼食は食べない。三食にすれば食べたような気がしないから。作業から帰って粗末な宿舎の中で、油を燃やしたカンテラの明かりで少しばかりの食事を取る。作業現場までは最初は二キロくらい、日増しに奥地へ伐採が進み、一カ月もすると六キロ以上にもなる。砂山の道を歩くのは衰えた体力では容易でなく現場に着くまでかなりの体力を消耗してしまふ。一部の者はノルマ以上にやって自分だけ少しでも多くパンをもらおうとする。すると監督がノルマをまた

上げて自分の実績を上げようとする。この人たちは後で体を壊し見る影もない病身となった。悲しい根性である。

後でドイツの捕虜と一緒に同じ現場で働いたことがある。ドイツ人は団体行動と団体交渉しかしない。絶対にノルマを増やさせる事はしない。ナチス魂は立派である。大和魂はどこに行つたのか。

ドイツ人が陰に隠れて、あのととき日本がソビエトを攻めてくれればという話もした。

宿舎は自分で作る

何か月もすると次の場所に移動する。何にもないソビエトでラーゲルは自分たちで作る、半穴式の小屋である。道具はスコップと斧だけ。ランブもなく、油に芯を入れて燃やした。

ソ連兵の猫

私たちは何を見ても食べ物に見える。ある時、ソ連兵のかわいがっている猫が小屋に入って来た。私が懐に入れて、棍棒を持ってやぶの中に入った。頭を一撃、これを分解して飯盒に詰め込んだ。

翌日の作業は、戦友九州の森川と一緒に。皆と離れた所で作業し、張り切つてノルマを早く達成し、久しぶりの肉鍋ならぬ猫鍋となった。森川が大事にしていた砂糖も入れた。煮れば煮るほど泡が出る、二人は元氣百倍、お互いに顔を見合わせた。その日から一週間は、誰かに密告されはしまいかと心配の連続であった。ばれると銃殺かもしれなかった。

砂漠の亀

我々は移動する度に色々な事に遭う。監視兵の横流しも激しくなり、食料が乏しくなっていた。ここカラコルム砂漠に近いトルクメンの砂漠には、山亀がいた。山亀は海亀より甲羅が厚く肉が多い。土地の住民は宗教的に豚と亀は忌み嫌って食べない。食わんがためなら作業のつらさも忘れ、できるだけ作業を早く済ませ、亀捕りに出掛ける。目を追つて作業は奥地へと行かなければならない。暑い地方なので私はフンドシ一つになって手製の下駄を履き、帰りには下駄の跡をつたって帰る予定。欲を出して天秤棒にぶら下げて六匹も捕った。足がふらふらであった。

そのうちに帰る道がわからなくなった。心を決めた、どうせつらい作業に出るより、今夜一晚だけでもゆっくり寝ようと思った。薪は辺りにたくさんあるし、護身用にマッチは持っている。側に焚き火をして砂にもぐって寝てしまった。

翌朝目を覚ましたら、もう太陽が真上に上がっている。もう十時過ぎであろうか、ゆっくり起きて、そのうちにどこか以前の作業場に出くわしてラーゲルに帰れると思った。

一日じゅう歩いても砂漠の真ん中、気が焦り出しているのが渴く。ふと見上げると近くの枯れ木の上に巣があるようだ。上空には大きなタカが飛んでいる。きつと何かがある。登って見たら乾いた獣と卵が二個あった。これで助かると思った。

その日も夢中になって一日じゅう歩いたが夜になってしまった。ところが遠くに火の明かりが見えた。ラーゲルでは時々道に迷って帰らない者のために当番を出して小高い所に火を燃やしていた。

方向がわかったので安心はしたが、そのまま帰った

のでは明日からまた作業がある。ラーゲルが見える所で草をむしって食べたりして休養を取り、作業の終わった夕方になってから、ふらふらしながら帰った。監視のソ連兵も喜んでくれ、砂糖とパン一切れももらった。

カザフスタン

道路修理の作業に従事した時、私はカザフ共和国にもいたような気がする。北極に連なるソビエトでは二番目の大きい国である。カザック人は気性が激しく作業も厳しい。コザック騎兵の発祥地、馬は女も子供も下駄がわりのようなものである。

草原では遊牧民が多く、道すじにはパオ（フェルトで覆った移動式テントに住んでいる）があり、私たちが訪問して、彼らの乏しい生活の中から、石鹼やお茶殻でリビョーシカ（手作りのパン）と交換した。またパオの中ではバターを作っていた。ちょうど正月の餅つきの音を思い出させる。バターを取った残りはヨーグルトや乾かしたものをお茶と一緒に食べる。外では、一こぶラクダがのんびり寝そべっていた。実にの

んびりした風景であった。

羊を盗む

道路修理に従事したときのこと、近くのホルホーズ（農場）に羊の群れがいた。夜になって二、三人でこれを盗むことになり私も参加した。夜は羊はおとなしくなる、首巻きにして歩いても声を出さない。うまくいって三頭を獲得できた。頭の解剖、料理は、盛岡農学校出の菊池がした。穀類二、肉八の肉飯であった。朝になると、草原の向こうから騎馬隊が鉄砲肩に走って来た。すかさず監視兵二人が屋根の上に登って、マンドリン小銃をぶっ放して追い払ってくれた。食料の少ないことが分かっていたのであろう。

ソ連兵の操縦

伐採作業場から集積地まで、薪の搬出作業に従事したことがある。三人一組、積み込み作業の要領は分かった。中身は空洞、上辺だけ高く積む。カンチャイ（終わり）。休憩したときは、ガソリンのパイプに綿を詰めて故障を起こさせる。運ちゃんはうろたえる。帰りには我々が直してあげた。

自動車が川を渡る

大きな川を貨物自動車を渡すのに、ソビエトならではの仕掛けを見る。川幅百メートル以上あるが、まず川の兩岸にワイヤーを張り、大きな船をワイヤーに輪でつなぐと船尾の舵にあたる水の抵抗で自然に川岸に接岸する。日本ではこのような原始的方法は見たことはない。

ウオッカとの出会い

船で運ばれた貨物自動車は、集積地に運ばれ薪は貨車積みとなる。私たち専門に貨車積みのため小さなラーゲルにいたことがある。

ある時、ラーゲルの外に水くみに出た。百メートルくらいの所に水くみ場がある。そこで水をくんでいると、ロシアの老人が、水筒（日本の将校用のもの）のふたを開けて見せ、イヤボンスキー・サルダート（日本の兵隊さん）日本にもこんなものがあるかと尋ねる。見たらウオッカのにおい、途端に私はしがみついてがぶ飲みしてしまった。五臓六腑を駆け巡り、いい気持ちになった。ふらふらしてラーゲルに戻ったら、

監視兵に見つかつて、一日炎天下で水桶を持って立たされた。

キルギス共和国

ウズベック共和国の隣、中国の天山山脈に沿つた、中央アジアの高地にあるキルギス共和国にいたときは、小さな炭鉱町で石炭の積み込み作業をしたことがある。

ラーゲルより三キロくらいの駅に、米国製のロシア人にも足に合わないような大きなスキー靴を履かされて歩いたことがある。栄養失調の私たちには歩くだけで大変である。町の人からは、ヤボンスキー・バジンキ（日本人の靴）と笑われた。毎日真つ黒な顔で大きな靴を引きずつて帰る、我々はこっけいと言うより哀れであつた。

貨車積みする駅の駅員で若い女の車号係（列車・貨車の組替・編成の企画作業）がいた。私も車号係をしたことがある、懐かしいので話をした。ソ連の若い女は皆きれいに見えた。

私のけが

近くに製材工場がある。シベリアからの木材の貨車おろしに駆り出される。皆体力は衰弱しきつている。長い木材に十二、三人肩を寄せ合つて持ち上げる。夜遅くまで働かせられた。私は作業中木材に挟まれて脛をけがした。このとき助けてもらった人は新潟県の古川新太郎さんで、ラーゲルまで背負つてくれた。お礼を申し上げたくて、三十五年ぶりに東京の日比谷公会堂で再会を果たし、お礼を申し上げた。

広いラーゲルに病休でただ一人、手当ては町の看護婦ナーシャが毎日通つてくれた。熟した桃臭い息をぶんぶんしながら、優しい美しいロシア娘で、「ドラストウイッチェ、スパコイノーチ（今日はお休みなさい）」と、ほのかな温かい言葉が残る……。『ダスウィダーニャ……（さようなら）』腹をすかした青春は燃えなかつた。

命がけの仕事

決死の食料あさりである。小高い丘にラーゲルがあつて、四方の高いやぐらに監視兵がいる。丘の麓に

は炭鉱町があり、レストランもある。作業中に小銭を拾うことがあった。

小銭を利用して、月夜の晩に建物の影を落とした線上を走って、鉄条網の下を潜り、崖を下って夜の町に出る。多民族国家であるから、日本人で捕虜でも差別しない。おおらかで人懐こく親切な住民が多い。まずレストランで小銭を出して、何も求められるものがないが、珍しがつて人が集まってくる。日本のことを色々と聞く。電気があるか、バリカンがあるか等幼稚である。面白い話や涙物語をすると、同情してパンの残りやスープをくれる。帰りは街はもう寝静まっている。崖をよじ登り、また月夜の影の死角をねらって帰る。見つかるかと銃殺である。生と死の際どい瀬戸際を歩いてきて、様々な思い出が錯綜する。

食糧事情

食の乏しいのはソ連国民全体であり、捕虜に対しては家畜同然、日本の家畜のほうがうらやましく思っていた。粗末な黒パンはライ麦をもみのまますりつぶした粉で作ったようなもの、スープは雑穀のフスマを糊状

にしたもの、いずれも極端に量が少なかった。慢性的飢餓状態で、劣悪な食事と過酷な労働のノルマに悩まされながら異国の地に倒れていった戦友は一年目は特に多かった。クシャーチ(食いたい)、スパーチ(眠りたい)、ダモイ(帰国したい)の毎日であった。

等級検査

昭和二十三(一九四八)年の七月初め頃は、私の体力も限界にきていた。この頃、ダモイトウキョウ(日本に帰れる)のうわさを耳にするようになった。

ソ連の女性軍医の等級検査がある、別名ダモイ検査と呼んだ。聴診器も何もない。裸にされ、背中を皮を引っ張ったり、尻たぶを引っ張る。アジン、ドヴァ、テリー、(1、2、3)と人の体に等級をつけて作業にも軽重をつけるようになった。「オカ」は病弱者で軽作業とダモイ組、私はダモイ組に回されたようである。

ダモイトウキョウ列車

シベリア本線を五日余り走る。ダモイトウキョウ列車の皆の心は初めて日本晴れであるが、これもつかの

間、また受難、ソ連は共産主義の国であるから共産主義を理解した者から日本へ帰すと言っている。

我々のグループは病院の退院者と全国からいろいろな人が集まった作業隊であつて、部隊丸ごとの作業隊ではないので、民主化運動が行われなかつた。

途中、我々と同じような貨物列車にソビエトの集団疎開の住民が乗っていた。向こうからサハリンはどのような所かと聞かれた。我々は、気候もいいし、ジャガイモも魚もたくさんとれるとロシア語で言うと思つていた。スターリン政策で強制移住させたものと思われる。

民主化運動

収容所内はたいてい軍隊の延長の作業隊である。ソ連側は掌握しやすいのである。将校や下士官は、昔のように兵隊を当番につけて、作業しない。パンはピンハネし、上げぜん据えぜんで兵隊を使った。これでは兵隊が下士官に殺されるようなもので、日本の軍国主義は民主主義とは相反するものであつた。

一部の兵隊から民主運動が起こり、旧軍隊の将校、

下士官はアクチブ（積極分子、活動家）にいじめられた。

ナホトカ港と赤旗

列車が山間を抜けると眼下は海、ナホトカ港の終着駅に七月初め頃着いた。海の香りが懐かしい砂浜には赤旗が林立し、何千人かの帰国予定者たちが収容所に入りきれずあふれていた。引揚船の入港を待つ人たちは、歩く時はスクラムを組んで労働歌を歌う。「赤旗の歌、スターリン讃歌、革命歌」など。アクチブ行動隊員が集会で共産党のアジ演説をする。

起床から就寝まで気は許せない。私は偽装転向して共産主義を勉強するふりをし、ラーゲル内の図書館からマルクス主義の本や関係する本を何冊も借りて貸出簿に記帳した。

最終集結地ナホトカの砂浜にテントが多く張つてある。テントの中もすし詰め、緊張の毎日である。便所は海辺の砂浜で用を足す。ある日ここで小学校の同級生一戸町姉帯の中村春雄と会つた。彼は先に来ているらしく、糞に消毒液をかけて歩くのが仕事のように

あった。

引揚船「朝嵐丸」

ついに所し丘を越えて港に出た。待ちに待った引揚船「朝嵐丸」が、日章旗を翻して接岸しているのが見えた。

昭和二十三年七月十一日、千六百九十四人。名前が呼ばれたラップをかけ登って本船に足を踏み入れたとき、両側の船員や日赤看護婦さんが我々を迎えてくれた「お帰りなさい、長い間御苦労さまでした」この一言が胸に迫り、涙を抑えることができなかった。

船内は暫くは平穏であった。私も四年半前グレンカイナグ玄界灘を渡って来た時のことを思い出していた。この時も二人くらいの中で船酔いした者がほとんどで、私は辛い元気であるため、監視兵や色々な作業に駆り出され、弁当を三人分も食べたことを思い出した。

はるかに祖国の山並み

船が日本海の荒海に出ると船内は異様な気配が漂い、革命歌の合唱と野次で騒然となった。赤旗組の演説、アメリカと日本政府に対して反目。日の丸組は、

ソ連で被った戦友の恨みを言う。厚生省の職員は船内放送があり、両陣営も静まった。

はるか水平線の彼方に祖国の山並みが浮かび、舞鶴港の陸地がはつきりし、美しい景色を見たとき、「ほんとうに生きて帰った」という実感がわき、涙にむせんだ。

検疫と復員手続きを済ませ「米駐留軍の聴取」も終わって、帰りの特別臨時列車では秩父宮妃殿下のお出迎えをいただき、日本も変わったなあと感激をした。

それから同郷の柴田さんに東京に寄っていく事を伝えてもらい、杉並区久我山の従姉妹に寄り、二、三日遅れて四年半ぶりの我が家に帰った。

ソ連見たまま

国家や団体組織の中にある者は冷酷で欺瞞的だが、関係のない一般労働者はお人好しで楽道家、おおらかさがあって民族的偏見や捕虜に対する特別な軽視もない。

私たちは共産主義教育の対象とされない集団であった。マルクスもレーニンも知らないが、目の前に見せ

つけられた現実と共産主義社会の理想とは反対なことばかりであったような気がする。ソ連という国を理想化している人たちにはわからないと思う。

当時ソ連は戦争の痛手を負っていて、生活物資と共に若いソ連の男性が不足し、独ソ戦で戦死した夫を持つ未亡人が多く、傷痍軍人も多く見られた。これがため満州からあらゆる物資を根こそぎ持ち去っている。抑留中日本のレコードを聞いてハッとしたり、日本の日用品がソ連の至るところで使用されていた。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十二年一月十五日

現住所 岩手県二戸市石切所字枋ノ木

学歴 旧制中学卒業

入隊前職歴 昭和十六年四月一日、国鉄盛岡管理部盛

岡駅車号係

入隊部隊 盛岡の騎兵二十四連隊が満州の八〇七部

隊となり満州国東安省宝清で入隊、動員

命令下りソ満国境の饒河に移駐、国境警

備隊歩兵に編入

ソ軍侵攻

貫通銃創二回、抑留地ウズベック共和国・カザック共和国・トルクメン共和国

復員

昭和二十三年七月十一日、朝嵐丸にてナホトカ港より舞鶴港に上陸

帰国後職歴

昭和二十三年十一月二十五日、二戸税務署に奉職

役職

全国戦後強制抑留補償要求推進協議会岩手県理事、二戸分会事務局長、町内会

長、納税組合長

(岩手県 田辺 壮久)

我が青春 出征からダモイ

千葉県 椎名 帯刀

はしがき

昨年の暮れに高橋孝之さんが訪れて、終戦五十周年を迎え、同志の抑留生活について記憶をたどって書いて